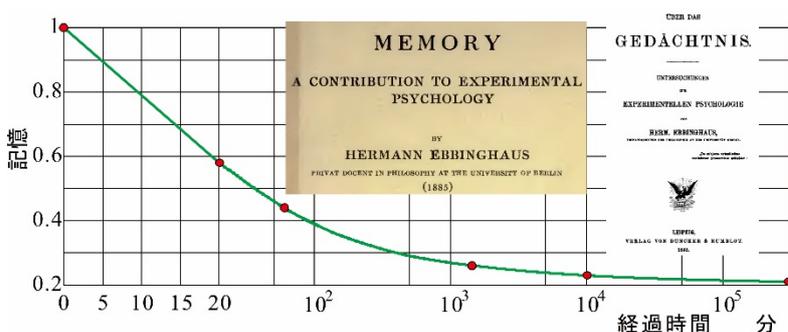


忘却とは忘れ去ることなり

関西大学・社会安全学部 小澤 守

「忘却とは忘れ去ることなり」は菊田一夫原作の1952～54年の間に放送されたラジオドラマ「君の名は」で極めて有名になった言葉である。筆者が見たのは1962年頃にテレビドラマ化されたものではあったが、このメロドラマの「忘却」とは一線を画すが、一般に人は年齢とともに物忘れがひどくなる。もちろんそうでない人も多いと思うが、筆者などすぐに忘れてしまうので、手帳に重要な日程などは書くようにしている。その肝心の手帳を忘れた日には動きようがないのである。スマートホンには日程管理などのアプリケーションがあり、設定しておけばアラートが表示されるようになっているようだが、筆者の場合はいまだに手帳派である。

1885年刊行のエビングハウス (Hermann Ebbinghaus) による *Über das Gedächtnis – Untersuchungen zur experimentellen Psychologie* (原著はドイツ語、英語翻訳版は *Memory: A Contribution to Experimental Psychology*) には、「子音・母音・子音」から成り立つ無意味な音節を記憶し、その再生率と経過時間の関係を調べた結果、正答率は図に示すように時間とともに減少していくことが記載されている。例えば24時間 (1440分) 後には33.7%にまで低下するし、1ヶ月後には21.1%になる。この曲線をエビングハウスの「忘却曲線」と呼んでいる。図の横軸は前回説明した対数グラフになっている。なお図中にはエビングハウスの1885年刊行の原著とその左隣には1913年の英語翻訳版の表紙をつけている。

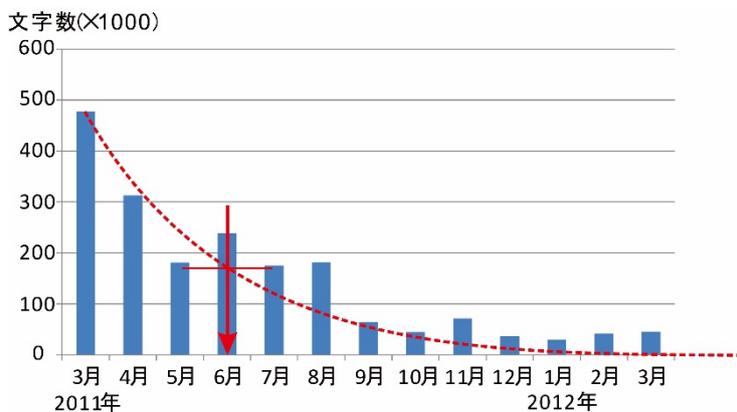


エビングハウスの忘却曲線 (Hermann Ebbinghausの実験データに基づいて作図)

工場などの事故原因に忘却によるものがどの程度あるのか定かではないが、少なくともヒヤリハットなどのかかなりの部分を占めているのは間違いないだろう。忘却を避けるのは適切な時期に、適切な学習を繰り返し行うことが効果的で、それによって記憶が長期間維持でき、予備校などでも活用しているとも聞く。この「適切な」が実際には問題なのだが、

このような記憶の減衰は、「人の噂も75日」という諺があるように、事故などに対する関心が時間とともに低下することにも繋がる。もう一つの図に示す福島第一原発事故後の月別新聞記事の合計文字数の推移（～2012年3月）を見ると、発災の2011年3月には50万字弱あったのが、多少のばらつきはあるもののほぼ指数関数的減衰経過を辿って、発災後3ヶ月にはおおよそ63%減少したことになる。自動制御に関連した重要な時間スケールに「時定数」というのがあり、この63%の減衰に達するまでの時間スケール、今の場合、ほぼ3ヶ月が記事掲載の時定数となる。不思議と先に述べた75日にほぼ一致するのである。新聞の記事の掲載は、基本的には新聞社の関心の高さに依存するが、社会の感覚と大きな乖離があるとは思えない。意味のない文字の組み合わせを使ったエビングハウスの実験では、図から読取れる時定数はせいぜい120分であるが、意味のある言葉や映像があれば、3ヶ月程度が時定数と考えてよいだろう。物事に対する関心を高く維持するには、この時定数を伸ばす工夫が必要となる。

さて労働災害発生状況を俯瞰すると、死傷者数は年を追って減衰傾向にあるが、重大事故発生件数は1985年頃を境として確実に増加している。機械安全のための基本概念であるISO12100は、設計者側には本質安全設計、安全防護対策、仕様上の情報、機械の取扱い説明書などを通じてリスク低減を図り、さらに残留リスク情報と警告をすることを求め、機器の使用者側に対しては残留リスク情報に基づいて、個人的防護設備、訓練、安全作業手順、安全管理、作業許可システムなどを通じてリスクを低減することを求めている。その中でも特に訓練や作業手順に関連して、忘却がえてして悪さをする。経験が十分にあるはずのベテランであっても、発生確率は低いとはいえ、やはりミスをするのを避けられない。教育訓練の頻度や実施方法など、決まりきったパターンを繰り返していたのではエビングハウスの忘却曲線の魔の虜になってしまうように思う。教育訓練のあり方など、今一度、見直してみてもはどうだろうか。



新聞における原発関連記事の文字数の推移 (佐藤一菜, 関西大学社会安全学部卒業論文, 2015.3による)